

研究ノート：「北田秋圃」をさがして (2)  
 ～ *Little Women* の初邦訳『小婦人』の翻訳者をさがす旅～  
**A Tireless Search for ‘KITADA Akiho (Shuho)’ (2):  
 Who Is the First Translator of *Little Women*?**

小松原 宏子

Hiroko Komatsubara

**要旨:** ルイザ・メイ・オルコット作『若草物語』は今もなお世界中で多くの読者に愛されている名作である。原題を *Little Women* というこの小説は、日本では明治 39 年 (1906 年) に北田秋圃という翻訳者の手によって、彩雲閣という出版社から『小婦人』というタイトルで初邦訳された。しかし、この「北田秋圃」が何者であったのか、どのようないきさつで *Little Women* を翻訳することになったのか——その正体は謎に包まれている。筆者は、たったひとつの情報である 1994 年の新聞記事を手掛かりに、代議士・高橋本吉夫人であったと言われる「北田秋圃」という翻訳者・高橋なをを追いかけてみることにした。これは 2022 年に発表した研究ノート「北田秋圃をさがして」の続編である。今回は、新聞投稿したなをの娘・松村たねの側から調査を試みたが、今回は出版社である彩雲閣、夫・高橋本吉、および高橋なを本人の親族など、多方向から検証してみる。

**キーワード:** 高橋なを、若草物語、小婦人、北田秋圃、高橋本吉、饗庭篁村、彩雲閣

**Abstract:** One of the great pieces of American literature from the 19th century, *Little Women*, authored by Louisa May Alcott, was first translated into Japanese in 1906 under the pen name Kitada Akiho. The title she chose was *Sho Fujin*, which means ‘little women,’ published by Saiunkaku. Kitada Akiho never published other works, and no one seems to know much about her. I began this research after reading a short newspaper article published in Yomiuri Shimbun on July 6th, 1994. Her real name was Takahashi Nao, the wife of a politician, Takahashi Motokichi. This essay is a sequel to my 2022 research note that introduced Nao’s daughter, Matsumura Tane. This time, I extend my research to the publisher Saiunkaku, her husband Takahashi Motokichi, and Nao’s relatives.

**Keywords:** Takahashi Nao, *Little Women*, Kitada Akiho (or Kitada Shuho), *Sho-Fujin*, Takahashi Motokichi, Aeba Koson, Saiunkaku

## 1. *Little Women* の初邦訳

### 1.1 『小婦人』の出版

*Little Women* (『若草物語』) はアメリカの作家ルイザ・メイ・オルコットによって 1868

年に書かれた自伝的作品である。南北戦争時代のアメリカ北部に生きたマーチ家の四人姉妹、長女メグ、次女ジョー、三女ベス、四女エイミーの一年間を描いた物語であり、主人公である次女ジョーは作者ルイザ自身がモデルであるとされている。

日本においての人気も本国アメリカにひけをとらず、1906年の初翻訳から現在に至る翻訳出版は200近い点数にのぼる。そしてその第1号となったのが、1906年（明治39年）の北田秋圃訳による『小婦人』（彩雲閣）である。しかし、この作品は、文学史にその名をとどめているにもかかわらず、翻訳者・出版社ともに、その実体はほとんど知られていない。

## 1.2 *Little Women* の版權

北田秋圃がこの作品を初邦訳したのは1906年。原作の *Little Women* が出版された1868年から約40年が経っている。本国アメリカでは、*Little Women* はその続編もふくめ、すでにベストセラーとなり「名作」の仲間入りをしていた。そのような大作を日本で初出版するという事は、版權を得るところから始まり、翻訳者や挿画画家についても厳選が求められる大仕事ではないだろうか。

事実、訳者自身による「はしがき」には、「かつは原著の版權所有者よりも懇なる同情を寄せられたれば、不文を顧みず梓に上すことゝはなしぬ、……」というくだりがある。日本での出版権を取るにあたって、それなりの努力ないし困難があったことがうかがえる。

このときすでに作者ルイザ・メイ・オルコットはこの世にない。版權はルイザの甥であり養子でもあった John Sewall Pratt Alcott (1865-1923) の手に移っていた。オルcottの記念館であるオーチャード・ハウス（マサチューセッツ州コンコード）の日本人スタッフ、喜久子・ミルズ氏は、ハーバード大学のホートン図書館における調査（2022年4月20日）結果を、以下のように筆者に書き送っている。

Little, Brown and Company と John Sewall Pratt Alcott の手紙のやりとりを見つけたのですが、残念ながら、日本での「小婦人」の出版についてのものは、何も見つかりませんでした。Mr. Takahashi や Prof. Woodrow Wilson などの名前も探しましたが、見つかりませんでした。しかし、Little, Brown and Company は、イギリスの“Little Women”の出版社には、コピーライトの代金をきちんと請求しているのです。その書類は、見つけました。

(From: Kikuko Mills Sent: Thursday, April 21, 2022 9:50 AM : 日本時間

To: 小松原 宏子 Subject: Houghton Library)

ミルズ氏は、その前に *Little Women* の出版元であった Little, Brown and Company に問い合わせたが、社内に過去の資料は残っていないのでホートンに行ってみるよう言われた、とのことである。もしホートン図書館にあるものが当時の記録のすべてだとすると、「イギ

リスへの請求はあったが、日本への請求はなかった」、という可能性も考えられる。

*Little Women* の初出は 1868 年である。著作権がフリーになるのは五十年後の 1918 年。『小婦人』の出版は 1906 年。著作権が切れるまでにはまだ 12 年ある。本来ならば何らかの交渉および契約、支払いが生じているはずであり、その記録が残っていてもおかしくはない。

ルイザの記念館であるオーチャード・ハウスにも手掛かりがないとすると、アメリカ側から著作権についての情報を得ることは難しいかもしれない。『小婦人』の「はしがき」に「原著の著作権所有者よりも懇なる同情を寄せられたれば」の一文がある以上、John Sewall Pratt Alcott 本人から何らかの厚意を得て翻訳出版が許されたと考えられるが、果たしてその「同情を寄せられた」人物はいったい誰だったのであろうか。

ここで着目したいのは「同情」という単語である。当時の日本、さらに、そのなかでも小さな出版社である彩雲閣が、イギリスの出版社と同レベルの著作権料を払う財力があったとは考えにくい。もしかしたら、日本という、欧米の目から見たら「新しい」国においてルイザの作品が読まれるのであれば、ということで、著作権切れを待たずに無償で翻訳権が与えられたのかもしれない。そうだとすると、請求書や契約書の類いが残っていないことともつじつまが合う。今のところそれはまだ推測の域を出ない。無償あるいは非常にわずかな謝礼のみで著作権が与えられたという記録もないからである。

いずれにしても、*Little Women* の次の邦訳は 17 年後の 1923 年、内山賢次訳による『四少女』（春秋社）。50 年の著作権が切れたあとである。

その後は 1927 年 1 点、1930 年 2 点、1932 年 1 点、1933 年 2 点、1934 年 4 点…といった具合に、続々と *Little Women* の新訳が世に出され、現時点に至るまで 94 名の翻訳者による 194 点の邦訳が出版されている（筆者調べ）。けれども、著作権が発生する期間の邦訳、つまり、John Sewall Pratt Alcott または Little, Brown and Company と正式に交渉し、契約を取り交わしたと考えられるのは、北田秋圃翻訳による彩雲閣の『小婦人』ただ一作のみである。

### 1.3 日本における著作権

では、日本に何か記録が残っていないかという点、こちらはさらに難しい。出版社である彩雲閣は現存しないだけでなく、その資料もほとんど残っていない。『小婦人』の奥付には、

著作者　北田秋圃  
           東京市神田区表神保町二番地  
 発行者　岡三郎  
           東京市小石川区久堅町百八番地  
 印刷者　吉見繁蔵  
           東京市小石川区久堅町百八番地  
 印刷所　博文館印刷所

発行所 東京市神田区神保町貳番地 (電話本局一六一八 振替口座四一〇五)

彩雲閣

とある。発行者の「岡三郎」は、歌人・岡麓（おかふもと）の本名であり、明治39年（1906年）に彩雲閣を創立したとされる。『小婦人』発行の年である。逆の言い方をすれば、『小婦人』は彩雲閣創立の年に出版されたのである。

国立国会図書館の蔵書検索で彩雲閣の出版物を調べると129件ヒットする。ジャンルは多岐にわたり、文学・演劇から、受験の参考書まで幅広い。おもしろいのはエスペラント語に関する出版で、『世界語読本』というタイトルのこの註解書は『小婦人』と同じ1906年、創業の年に刊行されている。

しかし、文学作品の翻訳書は少なく、国会図書館蔵書の中では、『小婦人』のほかには、ゴーストの『乞食』（二葉亭四迷訳 1909年）が見られるのみである。

そして、彩雲閣に関する記録や情報は、その出版物以外にはほとんど残されていない。

## 2. 北田秋圃とはだれか

### 2.1 序文によるヒント

「北田秋圃」という翻訳者はいったい何者だったのであろうか。彩雲閣から書物を出版した人物の中には、坪内逍遙、二葉亭四迷などの代表的作家があり、また、創立者の岡三郎（岡麓）と交流のあった文学者も数多い。しかし、この北田秋圃だけは、『小婦人』を訳したという以外の情報はまったくなく、他の著作物もない、正体不明の人物なのである。

当初、「北田秋圃」についての手掛かりは作品に付せられた序文のみであった。中表紙に

坪内逍遙序

饗庭篁村序

北田秋圃女史譯並畫

とある（『小婦人』彩雲閣 中表紙）。これにより、「北田秋圃」が女性であることと、挿絵も描いたことがわかる。

また、訳者自身のよる「はしがき」には、こう記されている。

本書は米國の文壇に其名聲嘖々たる Miss Alcott の著書 Little Women を抄譯したるものなり。原著は巧妙なる章句を以て充たされ、花あり實あり、喜怒哀樂の情紙表に溢れ、習慣風俗寫し得て眞に迫り、一個の美文家庭讀本として修身齊家の槩ともなすべきものなり。國語國文をだに能くせざる身を以て他國の文學を譯して原著の面影を傳へんと企つること、本來過分の業なれど、恩師の助力と切なる勧めとに任せ、かつは原著の版權所有者よりも懇なる同情を寄せられたれば、不文を顧みず梓に上すこと、はなしぬ、只夫れ玉を變して瓦となしたるの責は譯者に

あるものとして、見る人諒し給わんことを希ふになん。

菊かをる窓のもとにて

明治三十九年十月

譯者しるす

(『小婦人』彩雲閣「はしがき」)

この謙虚な文章から「北田秋圃」は翻訳を手掛けるのは初めての若い女性であろうと推測されるが、「恩師の助力と切なる勧めとに任せ」とある、この「恩師」とはいったい誰のことであろうか。

ひとつの仮説として、この「恩師」は、序文を書いた坪内逍遙であるかもしれない。逍遙の序文の全文をここに引用してみよう。

はじめの翻訳はとかく原文に泥みがちになるものなるをさることもなくて素直に楽さうに翻訳なされ候御筆つき地にも詞にも気取気のなきは編中の人物の無邪気なるが如くにて心持よくとりわけ何となく優にやさしく読まれ候は男の筆の及ばぬ所と感心いたし候『小公子』以来の好い家庭の読物と序文代りに御出版を祝し申候草々

三十九年十一月

逍遙

北田秋圃様

中表紙に「坪内逍遙序」とあるものの、これはどう見ても「手紙」である。

「序文代わりに」というくだりにしても、末尾の「草々」にしても、「北田秋圃様」という宛名にしても、これは正式な序文ではなく秋圃本人に宛てた書簡のようなものではないだろうか。

また、「楽さうに翻訳なされ候」「御出版を祝し」など、言葉のはしはしに、秋圃本人をよく知っている者の雰囲気があり「何となく優にやさしく」という言葉遣いには、相手への親しみも感じられる。北田秋圃は坪内逍遙の関係者であり、逍遙は秋圃を指導した「恩師」であったのだろうか。

## 2.2 読売新聞の囲み記事

筆者はその後、喜久子・ミルズ氏からの情報により、秋圃は3人の女性の合同ペンネームであること、そのうちのひとり、北秋田出身の代議士・高橋本吉の妻、なを（直子）であることを知った。根拠となるものは、1994年7月6日の読売新聞朝刊記事「若草物語を初翻訳」という小さな囲み記事である。前回の研究ノートにも掲載したが、この記事がなかったら「北田秋圃」の本名が知られることはなかったので、再度ここに全文を載せる。

世界中の子供たちに親しまれているL.M. オルコットの「若草物語」。写真は、この米国小説を初めて日本語に翻訳した三人の女性で、松村さんの亡き母、高橋なほ子さん（写真左）が大切にしていた。

写真の裏には「明治四十年一月八日撮影 小婦人出版記念として 北田秋圃」と書いてある。

「小婦人」は、「若草物語」の原題「Little Women」の直訳で、当時翻訳出版された本の題名。「北田秋圃」は三人共同のペンネームで、「田」は高橋の「た」、「圃」はなほ子の「ほ」から取ったという。

なほ子さんは、政友会の代議士だった夫・高橋本吉が米国プリンストン大学に留学中、東京の塾で英語を学んでおり、あとの二人はその時の仲間らしい。松村さんは、「『小婦人』には、母が描いた日本画風の挿絵も載っていました。もう手元にはないので、どなたかお持ちの方があれば、見せていただきたいのですが」と話している。



【若草物語を初翻訳】1994.7.6 読売新聞〔秘蔵写真館〕

東京都渋谷区、元国際基督教大学図書館長・松村たねさん（七六）所蔵

ミルズ氏は、この記事のことを翻訳者の谷口由美子氏から聞き知ったという。谷口氏は *Little Women* の完訳も手掛けている児童書翻訳の第一人者である。

ちなみに、このコーナーの記事は記者による取材記事ではなく、読者からの投稿によるものである。松村たねは、上皇陛下の家庭教師であったヴァイニング夫人の秘書兼通訳をつとめ、恵泉女学園普通部で教鞭をとり、自らの著書もある知識人であるが、このときは一読者として投稿コーナーに応募している。この投稿をした時、たねはすでに76歳。実家を出てからも離職してからも相当な年月が経っている。たねが長らく籍を置いた恵泉女学

園や、さいごの職場となった国際基督教大学図書館の関係者もこの記事のことは知らなかった。また、たねは、職場ではプライベートな話はあまりしなかったらしく、恵泉にも ICU にも、たねの母が翻訳者であったことを知る人物はいなかった。しかし、恵泉女学園の史料室には、たねの母・高橋直子（なを）の写真が残されている。明らかに、記事にある「北田秋圃」の写真と同一人物である。

いずれにしても、たねが 70 代も半ばを過ぎてから母の翻訳の『小婦人』をもう一度見たいと思ひ、新聞に手紙を書かなかつたら、そして、谷口氏がこの記事に注目しなかつたら、「北田秋圃」は永遠に文学史上の謎のまま終わっていたのである。

### 2.3 写真のゆくえ

高橋なを（1881-1971 年）が北田秋圃であった、ということの唯一にして最大の証拠は新聞に掲載された一枚の写真である。もしその写真の現物を見ることができ、また、裏に被写体となった人物の名が書いてあれば、「あとの二人」も誰であったかが解明できる可能性が高い。しかし、その所在は杳としてわかっていない。

昨年の研究ノートを書いた時点で、筆者は「北田秋圃」の写真を所有していたのは娘である松村たねだと考えていた。手元に写真がなければ新聞に投稿できないし、写真の裏に何が書いてあるかもわからないはずだからである。

しかし、記事を掲載した読売新聞記者（当時）の小畑洋一氏は、「写真の裏にあとの二人の氏名が書いてあった可能性は低い」と語っている。小畑氏は数十年前の記憶をたぐりながら「記事に『～と書いてある』という書き方をした部分は自分の目で確かめたときの書き方であり、『あとの二人はその時の仲間らしい』という部分は松村たねからの伝聞である書き方なのです。この表現から推測すると、たねさん自身もあとの二人については知らなかったように思われます」と話して下さった。

いずれにしても残念ながら、松村たねの資料や遺品のどこからも当該の写真は発見されなかった。

ただ、ミルズ氏に新聞記事のことを伝えた谷口由美子氏からは、「読売新聞の写真のウラに、< Maruki、東京、芝、新シ橋、国会議事堂前、丸木利陽写真師 >と書いてある」という情報もあった、と伺った。そこで、谷口氏に直接コンタクトを取ってみたが、「わたしの字で、記事の横にそんなメモがありました。でも、わたしが自分で、写真のウラを見たわけではないので、だれかに聞いたはずですが、それを教えて下さったのがだれか、もうわかりません。けれど、丸木利陽は実在の写真師です」という内容のお返事であった。

この情報をもとに調べてみると、写真師・丸木利陽の写真館で撮影された写真には、確かに裏にそのような印字があるものがあることがわかった。

「北田秋圃」の写真が、明治 40 年（1907 年）1 月 8 日に丸木写真館で撮られたものであれば、写真館の台帳に顧客の記録が残っている可能性がある。筆者ははやる気持ちで丸木利陽に

ついて検索した。その結果、丸木は北陸の出身であること、福井県立歴史博物館で資料展示のイベントがあったこと、写真資料は今も博物館で保存されていることが判明した。

丸木利陽（1854～1923年）は、明治・大正時代の御用写真師である。また、市井の人々の記念写真も多く手がけた。しかし、福井県立歴史博物館に連絡をとって見たところ、館で保管されている利陽の写真は、ほとんどが皇族・華族であり、一般の人々の肖像はほとんどなく、あっても誰のものか判明しないとのことであった。また、收藏されているものは写真のみであるとの回答だった。しかし、利陽に関しての研究の第一人者は関西大学教授の研谷紀夫（とぎや・のりお）教授であるので、問い合わせてみたらどうかという助言をいただいた。

研谷教授は2015年に『皇族元勳と明治人のアルバム 写真師丸木利陽とその作品』（吉川弘文館）を著している。筆者は研谷教授に連絡を取り、丸木写真館の顧客名簿か台帳のようなものが残っていないか伺ってみた。もしそのような記録があれば、秋圃の写真は撮影年月日と依頼主がわかっているわけだから、被写体の人物全員の氏名もわかるのではないかと期待したのである。

研谷教授は迅速かつ丁寧なご対応を下さった。しかし、丸木写真館、丸木邸は、ともに震災・戦災などを経て現存はしておらず、台帳などの資料もほぼ焼失したらしいとの回答だった。少なくとも現時点では、撮影者である丸木利陽から北田秋圃の三人（残るふたり）にたどり着くという手立てはあきらめざるを得ない。

### 3. 翻訳のいきさつ

#### 3.1 彩雲閣と坪内逍遙

「北田秋圃」にまつわるもうひとつの謎は、なぜこの人物（たち）が *Little Women* のようなビッグな作品を初邦訳するに至ったかということである。高橋なをは後に代議士夫人となるし、氏名不詳のあとの二人も、もしかしたら何らかのかたちで今も名まえが残る人物であるかもしれない。しかし、少なくともこの時点ではまったく無名の三人である。文学作品の翻訳者としてはおそらく経験のないこの女性たちに、この名作の翻訳を依頼したいきさつはいったいどういうことだったのであろうか。

当時人気のあった翻訳読み物といえ、坪内逍遙の序文にもあるように、バーネットの『小公子』があげられる。これは1890年から1892年にかけて、若松賤子の訳により「女学雑誌」（女学雑誌社）に連載され、逍遙からも激賞されるほどの高い評価を受けていた。しかし、若松は1896年に31歳の若さで病没。何らかのいきさつで *Little Women* の版權を得た彩雲閣は、若松のあとに続くような、若い女性翻訳者を模索していたのかもしれない。彩雲閣の周囲には当時の代表的な文学者が多くいた。創業者の岡三郎（岡麓）は、逍遙ないし懇意の文学者に翻訳者の紹介を依頼した可能性もある。



彩雲閣は、自社の出版物の刊行以外にも、書籍の発売実務などを行っていた。易風会による演劇活動の機関誌「趣味」や、帝国婦人協会の「日本婦人」などの販売事務である。「趣味」を発行した易風会のルーツは、坪内逍遙の家で催されていた演劇朗読会である（伊藤整「正宗白鳥と真山青果 -- 日本文壇史 -111-」, 「群像」17巻7号 1967年7月発刊 P.203 大日本雄弁会講談社 / レファレンス協同データベース）。

「趣味」の発行は彩雲閣創業の明治39年から始まっており、『小婦人』も同年の年末に出版されている。翻訳者の選定に坪内逍遙が関わっていた可能性は大いにある。

### 3.2 高橋なをと饗庭篁村

筆者は、「北田秋圃」の写真のゆくえを追うにあたって、本吉・なを夫妻の直系の子孫をさがすことはできないかと考えた。そこで、北秋田市の郷土史研究家・佐藤伸氏に相談をしたところ、ご尽力により、高橋家の親族を通して本吉・なをの長男・太郎の長男である高橋治氏にコンタクトを取らせていただくことができた。一年半以上追いかけてきた北田秋圃（高橋なを）の嫡孫であり、存命中のなをの記憶もお持ちの方である。対面を果たしたときは、まさに感無量であった。

治氏からは貴重な情報を多々いただいたが、同居していた祖母であるなをが『若草物語』の初翻訳者であることは聞いたことがなかったということである。したがって、写真の記憶もお持ちでなかったが、ご自宅にある可能性はゼロではない。いずれ、ご家族に手伝っていただける日に探してみるとお約束いただいた。

しかし、お話いただいたことの中には重要なポイントがいくつかあった。

なをについて知る大きな手掛かりとなった『秋田代議士物語』の記述のなかには誤りが散見されるが、治氏によって訂正された大きな点は、本吉は「親族から妻をめとった」のではなく、偶然同じ高橋姓のなをと結婚したのであった。事実、『高橋本吉君追想集』（非売品 / 溝口悦次編纂 / 大正11（1922）年）という私家版の追悼集の中におさめられた本吉の遺稿にも、「同姓の女を娶り」の記述（P.373）や、本吉の父・庄吉から知人に届いた手紙からの引用として「高橋昌長氏長女直子と婚約相整ひ」（P.53）のくだりもある。親族同士の結婚であったとしては不自然な表記である。

さらに重要なのは、なをの実家が饗庭篁村の親族であったことである。饗庭篁村（1855-1922年）は、明治時代の代表的な作家・演劇評論家であり、『小婦人』のもうひとりの序文執筆者である。いや、坪内逍遙の序文が、「序文」らしからぬことを思えば、この饗庭篁村こそが正式な序文執筆者と言ってもよい。また、篁村は逍遙とも親しい関係にあった。この篁村がなをの実家の親族であり、本吉の実家の親族ではない、ということは、なをを夫を通してではなく、つまり、「本吉の妻」だからではなく、個人の女性「高橋なを」として指名された可能性が出てくる。

高橋治氏の話によると、饗庭篁村は、高橋なをの父・昌長の再婚相手、隆子の兄であっ

たという。なをとっては継母の兄にあたる。篁村から見ると、なをは義理の姪ということになる。また、なをは「夫・高橋本吉がプリンストン大学に留学中に東京の塾で英語を習っていた」ということが読売新聞の記事に書かれている。篁村の推薦により、高橋なをに白羽の矢が当たった可能性は大いにある。

とはいえ、*Little Women* は本国アメリカでも、すでに古典的名作の地位を不動にしているビッグタイトルである。その出版にあたり、いくら少女向けの読み物とはいえ、「親せきの娘が英語を習っているので翻訳をやらせてみよう」ということになるだろうか。もちろんながら、そのような短絡的な話であるはずはない。

彩雲閣の岡三郎（岡麓）の周囲には、篁村、逍遙のほかにも、島村抱月、伊藤左千夫、正岡子規、正宗白鳥といった錚々たる面々がいた。なにも素人の若い女性に託さなくても、人材には不自由していなかったはずだ。篁村自身もエドガー・アラン・ポーの初邦訳者として知られている。逍遙も英語力に関しては誰にも引けをとらない。自らの手で翻訳を行うこともできたはずだと思われる。

「北田秋圃」は三人の女性の合同ペンネームであるが、その中心人物が高橋なをであったことは昨年度の研究ノートの結論である。当時の文学界の重鎮をになっていた人々が入りする彩雲閣からの出版を果たした高橋なをと、いったいどのような人物だったのだろうか。

### 3.3 キリスト教文学 *Little Women*

*Little Women* の翻訳者として高橋なをが選ばれた理由はふたつ考えられる。ひとつはそれが幼い姉妹を主人公にした少女向けの読み物であったため、翻訳者も作品も若松賤子の『小公子』に続くものとして期待され、英語力のある若い女性が望まれたであろうこと。そして、もうひとつは、それこそが最大の理由であると筆者は考えるのだが、なをがクリスチャンであったことではないだろうか。

日本の読者にはあまり知られていないかもしれないが、*Little Women* — 『若草物語』 — は、バニヤンの『天路歷程』をベースにした信仰の物語である。北田秋圃訳による『小婦人』は、舞台を日本とし、登場人物の名もすべて日本の名に変えられているためいっそうわかりにくいかもしれないが、クリスマスに始まり、一年後のクリスマスに終わる (*Little Women Part1*) この物語は、非常にキリスト教色の強い作品である。

高橋なをは、夫・高橋本吉とともに富士見町教会（東京都千代田区）に所属する熱心なキリスト教徒であった。富士見町教会は、内村鑑三と並び日本のキリスト教会の礎を築いた植村正久牧師（1858-1925年）創立の教会である。

『高橋本吉君追想集』におさめられた本吉告別式における植村牧師の説教（P.9-13）によると、本吉は、「明治39年9月30日に米国シカゴに於てサルトウ氏よりバプテスマを領したる」（シカゴで洗礼を受けた）とされる（『高橋本吉君追想集』P.11）。その後、大連日

本基督教、富士見町教会にて長老職（役員）をつとめるほど熱心なクリスチャンであった。

富士見町教会の資料には、高橋本吉・直子が夫妻で出席していた記録も残っている。一見、夫唱婦随ということで、なをも夫・本吉の導きにより信仰の道に入ったかのように見える。しかし、告別式説教にはこのようなくだりもある。

大正六年四月の衆議院議員宣教競走場裡より帰京せられた時夫人は良人が選挙の戦に没頭せられた結果にや面上稍凄味を見る心地すとて気に懸る由を申出でられた高橋氏は大いに之に刺戟され其の精神生活を修整することを努められ、祈祷会などの席上に之を述べられたこともある。

本吉の信仰生活は、夫人と対等であったと言えることを窺わせるエピソードである。

さらに、嫡孫である高橋治氏は、なをは、むしろ本吉より先に信仰をもっていたという見解を示している。なをの実のお婆の結婚相手は、安川亨という牧師である。安川は横浜で洗礼を受け、現在の千葉県船橋市にて郷里伝道を行い、のちに長老派の東京第一長老教会に転会し1874(明治7年)年、牧師に任命された。なをはその影響を受け、結婚前から洗礼を受けていた可能性が高いというのである。なをが本吉とともに所属した富士見町教会も長老派である。

『高橋本吉君追想集』にある友人・溝口悦次の記述によると、本吉が初めてキリスト教に触れたきっかけは、番町教会（のちの富士見町教会）の前を通りかかり、たまたまそこで行われていた葬式が非常に温情豊かなものに見えてうらやましく思ったことだという(P.178-179)。本吉となをの結婚の経緯はわからないが、もしかしたらふたりは富士見町教会で出会い、結婚に至ったのかもしれない。ふたりが結婚したのは1902(明治35)年、本吉がアメリカで洗礼を受けるのは1906(明治39)年である。なをはその前から敬虔なクリスチャンであったのではないだろうか。John Sewall Pratt Alcottは、信仰篤い女性にLittle Womenの翻訳を託すことが極東の日本という国での伝道に寄与するならば作者ルイザも喜ぶと考え、「懇なる同情を寄せ」たと考えるのは飛躍しすぎだろうか。

饗庭篁村は坪内逍遙と親しい関係にあった。『高橋本吉君追想集』では、本吉の恩師である内藤虎次郎（内藤湖南）が両者の関係、および本吉・なをとの関係に触れている。

君（筆者注：高橋本吉のこと）は高等師範を出でし後、早稲田中学に教鞭を執りしが、此間に坪内逍遙博士にいたく信用せられたり。今の寡夫と婚約の成りし時も、夫人の親戚なる饗庭篁村翁は、坪内博士に君の人物如何を問ひたるに、博士は口を極めて君を稱揚せしかば、事直ちに成りき。

（『高橋本吉君追想録』P.344）

これを読むと、本吉となをが本人同士で結婚の意志をかため、心配したなおの親族・饗庭篁村が坪内逍遙に問い合わせたところ太鼓判を押された、と推測される。

そして、前出の孫・高橋治氏は、逍遙にとっては、なをは単なる「後輩の妻」ではなかったと考えている。逍遙は岐阜美濃加茂市出身であるが、治氏によると、直子の妹・常

が、同じく美濃加茂市出身の津田左右吉に嫁いでいる。そのため、なをの父・高橋昌長あるいは昌長の父等と逍遙とのあいだに繋がりがあったのでは、と思われる。さらに、なをの伯父は政治家であり、中央大学の前身・英吉利法律学校の創始者のひとりである高橋健三（1855- 1898 年）であるという。この高橋健三は、坪内逍遙に正岡子規を紹介しようとした、というエピソードの持ち主である。なをは本吉を介さなくとも、逍遙との接点を持っていたのである。ちなみに、高橋健三の父は高名な書道家・高橋石斎である。つまり、なをはその石斎の孫娘ということになる。

いずれにしても、もし高橋なをがもともと熱心なクリスチャンであり、饗庭篁村がそのことを知っていて *Little Women* の翻訳者として推薦したと考えても大きな齟齬はない。篁村が序文を書き、逍遙が推薦文のようなものを寄せた『小婦人』出版の経緯がうっすらと見えてきたような気がする。

それでもやはり、筆者は「北田秋圃」というペンネームは、なをの夫、高橋本吉が命名者ではないかと考える。昨年度の研究ノートに記したとおり、北秋田への愛着の深い本吉が、愛妻なをのために考えた名まえだと思うのである。「北田秋圃」という名の読み方は、国会図書館のデータベースでは「キタダシュウホ」とされている。しかし、所蔵のある山口県立山口図書館の書誌情報では「キタダアキホ」となっている。原書に表記がないので、今となっては確かめようもないが、筆者はやはり「アキホ」である確率が高いと考えている。

### 3.4 今後の調査と『小婦人』再評価について

筆者が「北田秋圃」の謎に挑戦しはじめたときは、まるで暗中模索状態であった。昨年度の研究ノートには次のように書いている（小松原 2022: 70）。

なを本人の没年が 1971 年、読売新聞の記事が 1994 年、三女・松村たねの没年がたった 3 年前の 2018 年であったことを思うと、もう少し早く手をつけていたら、もっと多くの事実がたやすく明るみに出て、高橋なを、もしくは北田秋圃の功績にも光が当たったのではないかとと思うと残念でならない。

しかし、なをとともに暮らしていた直系の孫である高橋治氏と出会えたことで、かなりのことがつまびらかになってきた。もちろん課題はまだまだ山積している。最も大きな謎である「あとのふたりは誰か」、そして、「恩師」はだれか、なぜ高橋なをが *Little Women* の翻訳者として選ばれたのか、「北田秋圃」はなぜ『小婦人』一作のみを残し、文学史の表舞台から消えたのか……。

クリスチャンであることもふくめ、高橋なをを取り巻く環境は、なをが若松賤子に続く女性翻訳者の候補として多くの知識人の目にとまっていたであろう可能性を指し示している。しかし、それには当然実力が伴わなければならない。

そこで改めて『小婦人』を読み返してみると、「北田秋圃」は、この時代、まだ誰も訳したことの無い大作を、よくぞここまで、と言えるほどに、マーチ家の四姉妹の性格をみ

ごとに訳し分けていることがわかる。出版社の方針であろうか、舞台を日本に置き換えたために、不自然さは確かに見られる。また、抄訳であるために物語のたいせつな部分が一部欠落していることも否めない。しかし、もし原書に忠実にアメリカを舞台にしていたら——舞台を日本に、登場人物を日本人に置き換えていなかったら——そして完訳が許されていたら——『小婦人』は、かなり水準の高いものに仕上がっていたはずである。「北田秋圃」にはそれだけの筆力があつたと筆者は考える。

また、筆者は、『小婦人』というタイトルに対しても、一定の評価を下すべきだと論じている（小松原 2021）。以上の観点から、北田秋圃の『小婦人』には、時代と条件に鑑みた正当な評価がなされるべきだと考える。

北田秋圃をさがす旅はまだしばらく終わりそうにない。

今後の方向性であるが、まずは、高橋家に少しでもヒントになるものが残されているとしたら、そこから「あとのふたり」をさがしていけたらと思う。

また、彩雲閣が出版あるいは販売の実務を担った雑誌の中に、『小婦人』出版のいきさつについて書かれた記事がないか、ということも地道にさがしていきたい。

何よりも、高橋なをという女性とその時代について、もっといろいろなことを知りたい。この先進的な女性——英語に堪能で、キリスト教信仰を持ち、名作 *Little Women* を翻訳出版し、夫亡きあとと独り身のまま明治・大正・昭和を生き抜き、四人の子どもを育て上げ、自分は家庭の働きに徹しながら松村たねをはじめとする知識人たちを世に輩出した、古くて新しい魅力的なひとりの人物と、その業績にもっと光を当てていきたい。同時代に生きた人々との関連や共通点もさぐりつつ、「北田秋圃」という人物の立体像に迫りたいものである。

それには引き続き多くの方々の助力を仰ぐことになると思う。感謝の心を忘れず、自己研鑽を怠らず、今後も地道に研究を続けていく所存である。

## 注

本文における『若草物語』は、*Little Women Part I* を指すものである。

## Special Thanks:

The author would like to thank the following:

Ms. Kikuko Mills (ミルズ喜久子氏), Louisa May Alcott's Orchard House, Concord, MA, USA.

恵泉女学園 史料室

佐藤伸氏 (北秋田市 郷土史研究家)

小畑洋一氏 (元読売新聞東京本社世論調査部記者／元社会福祉法人読売光と愛の事業団常務理事)

高橋治氏（高橋本吉・なを嫡孫）

谷口由美子氏 翻訳家

研谷紀夫氏（関西大学教授）

日本基督教団 富士見町教会

福井県立歴史博物館

## 参考文献

伊藤整（1967）「正宗白鳥と真山青果—日本文壇史-111-」『群像』17 卷 7 号 大日本雄弁会講談社

オルコット（1904）『小婦人』北田秋圃、彩雲閣

杉渕廣（1989）『秋田代議士物語』秋田魁新報社

研谷紀夫（2015）『皇族元勳と明治人のアルバム 写真師丸木利陽とその作品』吉川弘文館

小松原宏子（2021）「『若草物語』はなぜ『若草物語』なのか：Little Women の邦題を考える」多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要 第 13 号：31-52.

小松原宏子（2022）「研究ノート：「北田秋圃」をさがして～Little Women の初邦訳『小婦人』の翻訳者をさがす旅～」多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要 第 14 号：57-71.

溝口悦次（1922）『高橋本吉君追想録』（私家版）

読売新聞（1994.7.6）「若草物語を初翻訳」

---

Accepted on 7 November 2022